

きれいな海

山口哲夫

*

水は軒下にまでとどいている。洋食若松食堂^{わかまつ}の玄関前の鉢植えが八和可まVのれんのあたりで水生植物のようにブツカリ浮いている。このままアフリカスイレンとなつて溢れる雪どけ水に根を生やしそりな気さえする。看板の横に突出したストロブ煙突の下半分が濁水で黒ずみ。溶けきれぬ雪くれがあてもなく不気味にただよう脆い景色のうち。西どなりの都屋洋服店^{みや}のトタン屋根に三人の肩をすぼめた男が立つ。いずれも二本足のズボンに手をさし込んで弱々しく笑っている。二階のガラス戸から顔をのぞかせている老婆も笑っているが。あるいは得体の知れぬぎょうぎょうしい叫び声をあげているようにも見える。これらの人々は充分に撮影者の目を意識しているがこれらの視線をたぐり寄せてみると必ずしも撮影者の視座とは一致しない。道路の中央にはほぼ電柱の高みにまで達した雪塊の島があり。島から島へとかけ渡された丸木橋の時に水書避難所と書かれた杭がさしこまれてい

る。その墨書きの文字に隠れるように防空頭布をかむつた男少年わらしがふたり杭の根元に見入ったよりなふりをしてゐるが。あるいは近在の農家の老人の論ちくぼんだ肩ののかも知れない。瓦ぶきの大屋根に消え残るさら雪がつややかな濁り水の表面に影をおとしてさらに新しい氷の晶をなしている。これ以上かさを増すような形勢はないものの濁り水はゆるみなくこの園のこの区画をおおっていた。逃入村にこりの濁り水。西方の突きあたり小丘陵の麗に望楼のようにそびえるなぐら堂の白い壁。その傾斜の具合はまぎれもなく夕暮れの脱臼の刻を指し示している。

＊

これは駅前の坂下旅館だろうか。うってかわった二棟のかごそかを傾き。三階建築の二階楼までをぼぼとどこおりになく浸したあふれ水の面を引戸や看板類の残骸がすきなくかおひ。たばこぼん便器類。さらにしゃぼんの箱。撮影者はちゅうど坂上にあたる来迎寺らいこうじの改札口を降りたあたり視座をすえたのだろう。手前から雪塊が白い砂浜のように傾城を伸ばして。そのかくしゃくとした囲繞感にはそれが今まさに溶けつつある偽の陸つづきだと

はとうてい信じさせないものがある。しかしここには地勢に従った漂流性がみじんもない。奇妙につややかに。なまめかしく書されたままそこに焼きつけられている。

＊

この均整のとれたおあらかな建築物は南方の酒造家^{ブドウ酒家}。雪くれの島から水を跨いで中核の小屋根にかけて頑丈な木の編み橋が渡され。その上で八人の男が記念撮影ふうに一列横隊をなしている。うち復員軍に黒眼鏡の男が明らかに虚脱した様子を見せているが他はなごやかな笑みをたたえ。かたわらで気をつけをしている織入れの男^{わらし}少年二名はどこかほこらしげでさえある。隣家の小屋根からこちらの岸へ慎重に跳びこえてこようとしている中年女のモンベがぶれている。

＊

これはなんとというブラットホームだ。来迎寺の停車場の駅舎であることは確かなのだが。上り一番線と下り二番線の間の走路にみなぎったあふれ水がカンテンのよりのな膠着した輝きをみせて西方の小丘陵の麓まで縦貫してい

る。一番ホームの白線の後ろの雪塊群の前に五つほどたんの五人の駅員が斥候のようにたたずみ水面下の四本のレールを見降しているが。皆一様に制帽の下の顔を崩し白い髪をみせているのがいぶかしい。あたかも無人の二番ホームに視座をすえた撮影者が水路をへだてて飛ばした洪水に関する冗談に五人がいつせいに反応した瞬間とでもいったふうに。かまたの跨線橋が洗われたようにくつきりと浮んでいるが。ここに多数の避難民でも鈴なりになっていればまっことロシアの絵そのものだ。あたりに黒い鋼鉄車の姿が見られなせいだろうか屋根の上に残った雪をまばらに置いたこの駅舎はどこか突出した頂上感をさえただよわせている。それにしても何という走路の水面の平靜さだ。

＊

一般の木舟が浮んでいる。背景にかすむ裸木の並びぐあから水田地帯とおぼしいこの辺り。撮影者のいる雪塊の陸つづきが舟をなしこちら岸から向う岸にかけて一本の白い糸のようなものが張られているのはなぜだろう。舟上には手拭いで頬かむりした漕手と耳を隠す防寒帽を

かむった農民が四人。そのうちの一人が白い糸をつかんでこちら岸を見すえているが白い糸の先をたぐっていくと向う岸に黒眼鏡の男が一人両足をきちんとそろえて面立している。その逆光のマント姿の異風にはかれが何事かの使者であることを濃厚にうかがわせるものがある。舟上の五人の漂流者の顔面に少しも笑味が浮んでいないのは要するにこの白い糸によって伝えられた八指令Vによるものであると断定してさしつかえをいだらう。

(聯作妖雪譜のうち)